講演会参加記

澤柳研究のこと
——思い出と共に

庄司　和晃

（2012.10.6（土）全国研例会にて。）

講演1
文部官僚から国際教育家への軌跡
——『澤柳政太郎私家文書』の整理を通して——……北村和夫
講演2
大正時代の新教育と社会
——澤柳政太郎と成城学園の位置——……広田照幸

よかったです。

久しぶりに、澤柳さんの世界に、ひたることができました。

録音された澤柳さんの声に接しうるとは、思いもよりませんでした。騒音の多いものでしたが、事前に、新田義之先生のくわしい解説がありましたので、何とかくみとることができました。明治の教育に賭けた澤柳さんの存念とその後の心意気とにふれ、リアリスティックな感慨をおぼえました。

これは、貴重です。

澤柳さんは、昭和二年に亡くなられましたが、後輩にとっては、得がたいものです。お声には、ことのほか、人格がにじみ出るものだからです。著作を読むときの、何よりの助けになります。むろんのこと、歴史的な価値をもつことは、いうまでもありません。

新田先生には、はじめてお目にかかりました。うれしかったです。奥様の貴代先生には、昭和四十六年に発足した澤柳研究会の最初から、えらく世話になりました。この年に、研究双書の第一巻として刊行された、貴代先生の『澤柳政太郎　その生涯と業績』があったればこそ、この研究会が力強くスタートを切ることができたといってよいのです。この書は、新しい時代の、新しい研究の成果が、展望をもって示唆深く、論じられていたからです。

発足してから、いつのまにか、三十三年もたってしまいました。その間、発展的解消があり、そしてこのたび、『澤柳政太郎私家文書目録』の刊行記念の特別講演会、ずっと通してみれば、たいへんな進展ぶりです。

ここまで来たんだなあ、とあらためて思いを深めたしだいです。

広田照幸先生の発表で、その中に、澤柳さんの『実際的教育学』への感想が見えました。

ちょっとしたことでしたが、私には、ごもっとも、と合点するところがありました。

それは、「実際的教育学を読んで、じつに痛快でした」——という一点です。

広田先生は、そう言われて、微笑されたのが、とても印象的でした。

そうでしたか、やはり、と思いました。

ご縁だったのだと思います。なにしろ、澤柳さんの魅力がいちばん突出している本に出会われたのですから。

明治四十二年に出版された、この『実際的教育学』は、教育学の根本改造という科学化の志向を宿す書でありました。

そこのところを、広田先生はこうも言われています。

「澤柳の教育学批判（『実際的教育学』）は、今でも新しい。」

「澤柳のすぐれた点は、リアルな科学的認識の可能性を示したところにある。」

そして、以下の言及がありました。

「教育の研究・教育の改革、そこに斬新さがあると共に、その視点の限界も存する。すなわち、澤柳は〝学校教育学〟の分野にかぎられた、ということだ。」

「方法やカリキュラムなどはやったけれど、制度や組織の科学化の面はなかった。澤柳のは、ミクロでの科学的研究だったのだ。」

果してそうかということで、さらによく吟味してみなければならないが、とにかく如上の事柄の背景として、「大正期の新教育と社会」「成城学園の位置」「澤柳と小原そして親」「個性教育の本質的ジレンマ」等々については、たくさんの統計資料や年表的資料のもとに、浮き彫りにされ、提言をし、教育社会学の効力を発揮してくれました。成城の社会的基盤ということで、従来の澤柳研究上の手薄さを知らされた思いでした。同時に、教育社会学の進歩にふれ得た機会でもありました。

北村和夫先生の発表を聞いていて、澤柳研究の総体的な到達点を見る思いがしました。

話では、先に、つぎの三点が出されました。

①文部官僚としての澤柳
②教育学者としての澤柳（教育学の自立を）
③成城学園の創設者としての澤柳（大正期新教育ほか）

そして、言われました。

「①と③は、結びつかない。が、②でしぜんに結びつく」と。

これは、面白いです。②にポイントが存するということ。それはつまり、澤柳研究の中核を言い当てた文言、と受け取ることができるからです。

やっぱり、そこをきっちりとおさえなくては、研究の全貌が見えてこないといえるわけです。『実際的教育学』の重味、いよいよ感じさせられます。

かくして、北村先生は、つぎつぎと運び進めてくれました。

文部官僚・第三次小学校令・六年制義務教育・単一制・公共的使命・国際教育・成城の意義・研究的学校・実験学校・小学教育学と児童学の建設・カリキュラム・自然科・聴方科・読方科・児童文化・児童文学読本・児童画・学校劇・リトミック・始期問題・修身科・林間学校・ダルトンプラン・自学・子どもと教師・同人意識・成城高等学校の精神・現代教育の警鐘・教育問題研究・権威ある研究・本当の教育、等々。

各項のディテールに言及した壮大な展開でした。まさしく、「国際教育家への軌跡」、その内実を示す具体的展開の節々でありました。

見方をかえますと、澤柳研究の総説、ないしは成城教育概論とも称し得るものでした。『澤柳政太郎私家文書』の全整理を通して得た実力なり、と見受けました。

はじめ、澤柳文書の大半は、大きなお茶箱にどっさりと入っていました。いつごろからか、初等学校の校長室に置いてあったものでした。そうした資料の係であった私は、そのままにしておくと、いつ散逸するかわからないので、とにかく、似た者同士を束にして、急いで、製本化をたのみました。でかい本になり、それが十数巻になりましたでしょうか。それを校長室のガラス戸棚に保管して、希望する人たちにお見せできるようになりました。

その不十分な製本の類を、北村先生は、教育史的な眼力でもって、検討を加え、既成の全部をバラして、あらためて、きちんと調えてくれたのが、今日の『澤柳政太郎私家文書』です。多大の労力をもって、新規にまとめられたわけです。

北村先生には、ながーいこと、世話になりました。「澤柳研究会開催」「澤柳研究誌発行」「澤柳全集刊行」、そして今しがたの「澤柳文書整理」というように。私は、途中で、成城を離れましたので、一緒に仕事ができたのは、澤柳全集の完成までです。

思えば、まことにいい協力者を、成城は得たものです。北村先生は、当時東大におられた教育学者の稲垣忠彦さんが推薦して下さったのです。こちら学園側のおたのみによって実現したのでした。こつこつと進まれる研究熱心な、よいお弟子さんとして、稲垣さんがおくりこんでくれたのです。ありがたいことでした。今ではもう、北村先生は澤柳研究の第一人者です。

今度の発表では、客観的な考察の内容もさることながら、北村先生の澤柳政太郎観をも聞きたく思いました。存分に、主観を含めた澤柳観を耳にしたいと思ったのです。いつか、文章にでもなさるよう願っています。

今後のことになりますが、広田・北村の両先生が、しばしばタッチされていた小原國芳さんのことを、学園側としても、もう少し研究を進められたら、と思います。小原さんの教育づくりや学校づくり、それに成城での研究業績や研究成果の普及方法など、新しい観点が見つかりそうです。

小原さんは、創設後三年目の大正八年に成城に来られたのでしたが、それ以前には佐藤武・平田巧・諸見里朝賢・奥野庄太郎ほかの方々が、ごそっとおられます。どの方も、教育の実験研究の遂行者たちでした。なかんずく、奥野さんの聴方教授（お噺の教育）の実験と成果とその提唱には、澤柳さんがことのほか満足し、喜ばれたと伝えられています。子どもたちに、この教科が、わあっと歓迎されたからですね。教え子の鶴見和子さんは、とにかくこの時間が楽しく、待ち遠しかったと言い残してくれました。

そのごとく、大正六年から昭和二年まで、澤柳さんの息のかかった現場人の仕事を再び見直して、今の教育と結びつけつつ、さらなる独創的研究を生み出すのも、澤柳研究の未来にかかわることではないでしょうか。

（しょうじ　かずあき・元成城学園初等学校教諭）

（『成城教育』第108号　二〇〇五年六月二十五日発行）

特別講演会「澤柳政太郎とその時代」
成城学園教育研究所主催
『澤柳政太郎私家文書目録』刊行記念
二〇〇四年十一月二十日（土）成城大学七号館

（記録は、右の『成城教育』第108号に）